

ダークツーリズム in 銚子ジオパーク

Dark Tourism

銚子の光と影を巡る旅





銚子市は、東京から約100km、関東平野の最東端に位置し、北は利根川、東から南は太平洋に臨み、三方を水域に囲まれ、変化に富んだ海岸線を有しています。古くから景勝地として人々に愛され、2012年9月には日本ジオパークに認定されました。このような自然環境を活かして、銚子の先人たちは、太平洋と利根川から多大な「恩恵」を得ることによって繁栄と発展を遂げてきました。

その一方で、太平洋と利根川がもたらす「災害」（津波、海難事故など）と闘ってきた歴史もあります。近年、観光の一つのジャンルとして注目を集めているものに「ダークツーリズム」があります。ダークツーリズム【Dark Tourism】とは、自然災害や戦災の跡地など、人の死や悲惨な出来事にまつわる場所を訪ね、先人たちの教訓を学びとることを目的とする旅行のことです。

「銚子ジオパーク」の見どころや銚子市の観光スポットを巡りながら、ちょっとだけ足をのぼして、銚子市の「災害」に関するダークツーリズムスポットも巡ってみませんか。



銚子ジオパーク
PR大使
ジオっちょ



鹿島灘



Route
3

まちなか
コース

銚子漁港
コース

Route
4

屏風ヶ浦
コース

Route
2

犬吠埼
コース

Route
1

Route
1 犬吠埼コース

銚子電鉄 犬吠駅



お土産品を販売しています。ぬれ煎餅の手焼き体験ができ、焼きたてのぬれ煎餅やたい焼きも食べることができます。



犬吠埼灯台



関東・銚子半島の最東端にそそり立つ「犬吠埼灯台」。犬吠埼灯台下の磯に降りれば、寄せ来る大波が迫力満点です。



君ヶ浜・涙痕の碑



「日本の渚100選」に選ばれた君ヶ浜。1677年延宝地震の津波は砂浜を越え、その高さは約17mと推定されています。



地球の丸く見える丘展望館



北総地区（千葉県北東部）で一番高い愛宕山の頂上に位置する「地球の丸く見える丘展望館」。海拔約90mの屋上からは銚子半島を一望でき、水平線の両端は丸みを帯び地球の丸さを実感できます。



小畑池



キャベツ畑の水源で、野鳥観察も楽しめます。1677年延宝地震の津波は、この場所まで到達しました。

君ヶ浜

白砂青松の海岸で、兵庫県神戸市の「舞子の浜」にちなんで、「関東舞子」の愛称で文人墨客に愛されました。高村光太郎は『智恵子抄』の中で「君が浜の浜防風を喜ぶ彼女はまつたく子供であつた」と書いています。竹久夢二の「待てど暮らせど来ぬ人を 宵待草のやるせなさ 今宵は月も出ぬさうな」は、君ヶ浜に咲くマツヨイグサを詠ったと伝えられています。1996年には「日本の渚百選」にも選ばれました。また、海面に映る月明かりの反射が月へと続く階段のように見える現象「月への階段」を見ることもできます。その一方で、過去には大きな津波にも襲われています。1677年延宝地震の津波では、君ヶ浜のあたりで「高神村大池まで浪上がり浜通り御林、松一万本余折れ」との記述が『先代集』（田中玄蕃家文書）に残されています。また、最近の研究によると、その津波の高さは約17m（遡上高は最大20m）であったと推定されています。このときの津波は、最初の地震の揺れが小さいわりに、後から大きな津波が襲ってくる「津波地震」と呼ばれるタイプであったと言われています。



君ヶ浜(平常時)



君ヶ浜(3.11津波の引き波時)

犬吠埼灯台



関東最東端に位置する犬吠埼は、山頂・離島を除いて日本で最も早く初日の出が見られることや、天然温泉の恵みを堪能できる犬吠埼温泉でも有名ですが、特に存在感が際立っているのは犬吠埼灯台でしょう。1874年、イギリス人のお雇い外国人技師プラントンが設計・監督し、国産レンガの二重壁構造を持つ地上31mの高塔に36km先まで光が届く第一等回転式フレネルレンズを装備した白亜の大灯台が岬の先端に姿を現しました。以来140年以上、犬吠埼灯台は現在もほぼ建設当時そのままの姿で海の安全を守っています。1998年には、歴史的な重要性から「世界灯台100選」にも選ばれ、さらに明治後期に建造された旧霧笛舎とともに国の登録有形文化財となっています。

涙痕の碑

1917年8月、青年詩人の三富朽葉と今井白楊は、避暑のために訪れていた君ヶ浜での遊泳中に、突然大波に襲われて溺死しました。翌年、2人の父は、彼らの死を悼んで「涙痕の碑」を建立しました。このときの大波は、進行方向が異なる2つ以上の波が重なり合うことで波高が高くなる「三角波」だったのかもしれませんが、この三角波のことを、かつての漁師は「人喰い波」と呼んで恐れました。また、「離岸流」に流されると、沖まで流されてしまいます。





Route 2 屏風ヶ浦コース



銚子電鉄 外川駅 



銚子電気鉄道の終着駅「外川駅」は、大正12年に建築された風情のある木造駅舎です。



大杉神社 



かつてはこの神社の近くに渡海神社がありました。津波の被害を受けて、高台に移転しました。



外川漁港と町並み 



漁師町の面影を残す町並み。路地が基盤の目のように整備され、坂を下りれば漁港へと続く。



千騎ヶ岩と犬岩 



千騎ヶ岩は千葉県の天然記念物に指定。千葉県最古の地層で2億年前ごろと推定されています。



名洗町 名洗不動尊 



名洗町の海岸付近では、東日本大震災の津波により、浸水家屋が多数発生しました。



屏風ヶ浦 



「東洋のドーバー」と呼ばれる「屏風ヶ浦」。長年の海水の侵食によって形成された自然地形。



銚子マリナー 



2011年3月11日東日本大震災の津波により、銚子マリナーの施設が壊滅状態となりました。



渡海神社 



702年に創建されたといわれ、津波のために976年に現在の地に移されたといわれています。

外川漁港

紀州出身の崎山治郎右衛門は、1656年に銚子に来て、2年後の1658年から外川浦で築港を開始するとともに、碁盤目状のまちづくりを行い、外川のまちは「外川千軒大繁盛」と言われるほどに栄えました。しかし、その後「むかしは家が数千軒あった漁場であるが、今から七・八十年前に、津波のため、家を流されてなくなってしまったのだが、現在ではまた、家が数多く出来て大漁場となった」との記述が『利根川図志』（1855年）に残っていることから、江戸時代に津波によって大きな被害を受けたようです。近年では、1960年5月24日未明にチリ地震津波が太平洋沿岸を襲い、外川漁港でも犠牲者が出ています。このときの津波は、「遠地津波」に分類されるタイプで日本から遠く離れた南米チリで発生した地震による津波が約23時間をかけて押し寄せました。



屏風ヶ浦



銚子市犬岩から旭市刑部岬まで続く、長さ10km、高さ約20～60mの断崖絶壁の海食崖（海の波によって削られた崖）です。イギリスとフランスの間にあるドーバー海峡のホワイトクリフに似ていることから、「東洋のドーバー」とも呼ばれ、2012年9月に日本ジオパークとして認定された「銚子ジオパーク」を代表するジオサイトの一つです。また、2016年3月、「屏風ヶ浦」は国の名勝および天然記念物に指定されました。その一方で、この崖は、海の波により年間数十cmの速度で侵食されていました。現在は、海岸に消波ブロックなどを設置して侵食の防止を図っています。

銚子マリナー

「人を助けたい、という人の大学」をスローガンとして、2004年4月に開学しました。現在は、危機管理学部、薬学部、看護学部の3つの学部があり、約2000人の学生が学んでいます。2011年3月11日の東日本大震災の地震・津波では、建物・設備や敷地には大きな被害を生じましたが、迅速な避難のおかげもあって、学生や教職員に人的被害は出ませんでした。その後、学生・教職員が協力して復旧作業にあたり、3月の銚子マリナー卒業式、4月の入学式、その後の授業も当初の予定通りに行うことができました。



3.11津波により大学キャンパスに乗り上げたヨット



海水浴客で賑わう銚子マリナー

开渡海神社

709年に東海鎮護と銚子半島の鎮めとして、外川浦日和（外川町の大杉神社の付近）に創建されました。後年、津波で被害を受けて、976年に現在の場所（海拔40m）に高地移転したとされています。その後、銚子高神の高見の浦一帯で大津波が起ったと言われており、この天変地異の様子が海神の怒りとなって遠く京都まで伝えられました。そこで、堀河天皇は、この災害を鎮めるために勅命を発し、1102年に銚子への御神幸祭（銚子大神幸祭）が始まりました。神幸祭は、1110年までは毎年行われていましたが、その後は20年に一度行われ、現在まで約900年も続いています。渡海神社は、神幸祭での外川浜への渡御の前日の宿泊社となっています。神社境内の森林は「極相林」と呼ばれています。極相林とは、裸地から森林が形成される過程での最終段階の状態に達した森林のことです。このような森林が出来上がるには、数百年から千年かかると言われており、千葉県天然記念物に指定されています。





Route 3 まちなかコース

飯沼観音 开



大仏の台座には、1945年の空襲による機銃掃射を補修した跡が残っています。

銚子吉兵衛の銅像



銚子醤油株式会社（現ヒゲタ醤油）の初代社長。水産業振興、銚子港近代化整備に尽力。

河岸公園



旧渡船場跡地に整備された「河岸公園」。新銚子大橋を眺める絶好のビューポイントです。

戦災復興記念碑



太平洋戦争も終りに近い昭和20年3月9日、7月19日及び8月3日の三度空襲に見舞われました。

ヤマサ醤油工場



しょうゆ味わい体験館では、ヤマサしょうゆや特製たれをつけておせんべい焼きが体験できます。

濱口梧陵紀徳碑



ヤマサ醤油の第7代当主、濱口梧陵の数々の功績が記された石碑です。

旧公正市民館



空襲で街の大半が焼け野原になり、この建物は「臨時病院」として使用されました。

濱口吉兵衛の銅像

1910年3月12日、銚子沖での暴風雪によって、出漁中の漁船が遭難し、300人以上の漁夫が溺死・行方不明になりました。このとき、多くの遭難者の家族らは、飯沼観音で漁夫の無事を祈りました。これらの海難遺族からの訴えに心を動かされた濱口吉兵衛（1616年に銚子で創業したヒゲタ醤油の当時の社長）は、漁港を整備することを決意して、1920年に衆議院議員に立候補・当選し、1925年から漁港整備事業を開始しました。その後、2001年度までの第9次整備計画の実施により、運河・外港・堤防の建設、港湾道路などの設置、埋め立てなどが行われて、銚子漁港は現在の姿となりました。ちなみに、濱口吉兵衛は、現在、銚子駅から外川駅までの10駅を約20分で結ぶ「銚子電鉄」の前身である「銚子遊覧鉄道株式会社」を1913年に設立しています。

飯沼観音



1872年、オランダ人のお雇い外国人水工技師リンドは、利根川等の河川整備にとって重要な水位表記の基準を定めるため、飯沼観音下の河岸に量水標（水位尺）を設けました。そこから得られた平均水面の観測データを基に飯沼観音境内に水準原標石を設置して水準測量の原点とし、これが日本最初であったことから日本水位尺（Japan Peil）と名付けました。その後、リンドは浦安市の堀江や隅田川河口の霊岸島にも水準原標を設置しましたが、これらは今でも堤防の高さや大きさなどを計画する際、河川に流れる水量を測定するために重要な役割を果たしています。なお、「飯沼水準原標石」は、「近代測量の出発点となる重要な記念碑」と評価され、2015年11月「土木遺産」に認定されました。

河岸公園

河岸公園は、銚子大橋を間近に望める利根川（日本一の流域面積）の河口近くにあります。江戸時代までの利根川は、江戸湾（現在の東京湾）に注いでいました。当時の江戸は、利根川の氾濫によりたびたび水害に見舞われていました。そこで、徳川家康は、1594年、江戸を水害から守ることを目的として、利根川の流路を江戸湾から銚子（太平洋）へと付け替える「利根川東遷事業」を指示しました。この事業は、伊奈家3代（忠次、忠政、忠治）にわたり約60年の歳月をかけて行われ、1654年に完了しました。これにより、江戸へと至る水運のルートが確保され、銚子から関宿（千葉県野田市）を経由して江戸への水運が盛んになり、途中の松岸（銚子市松岸町）、笹川（香取郡東庄町）、小見川、佐原、木下（千葉県印西市）などの河岸が賑わいました。この水運路は、鉄道が整備される明治前半まで流通の幹線として使われました。

濱口梧陵紀徳碑

濱口梧陵は、1645年に銚子で創業したヤマサ醤油の第7代当主です。梧陵は、実業家として偉大なだけでなく、防災・防疫の面でも優れた業績を残した人物です。梧陵は、1820年、紀州の広村（現和歌山県有田郡広川町）で生まれ、12歳のとき銚子に来ました。1854年安政南海地震（死者数千人）のときは広村にいて、その津波から村民を救うため、収穫した稲むらに火を放ち、高台へ導く避難路を示したおかげで多くの村民が津波から逃がれることができました。この逸話は、「稲むらの火」として広く知られており、現在、小学校の教科書にも載っています。また、広村を津波が襲った11月5日（旧暦）は、現在、「津波防災の日」（日本）、「世界津波の日」（国連）に制定されています。その後梧陵は、津波で住まい・仕事を失った村民を救うため、また、将来の津波から村を守るため、私財（銚子の醤油醸造業で得た資金など）を投じて村人を雇い、彼らの手により高さ5m、長さ600mの「広村堤防」を築きました。それから約90年後の1946年昭和南海地震のとき、津波が再び広村を襲いましたが、堤防のおかげで少ない被害で済みました。また、梧陵は、1858年に江戸でコレラが流行した際（江戸だけで死者10万人との説あり）、銚子で医院を開業していた関寛齋を江戸の西洋種痘所（後の東京大学医学部）に赴かせて、コレラの予防法を学ばせ、銚子でのコレラ防疫に業績をあげました。その西洋種痘所が焼失すると、1859年に梧陵は種痘所の再開のために300両を寄付しました。さらに、梧陵は、佐久間象山、勝海舟、福沢諭吉など多くの知識人と広い交流を持ちました。ちなみに、紀徳碑の碑文は、梧陵の死を悼んで勝海舟が捧げたものです。





Route 4 銚子漁港コース



夕陽に映える広場



銚子大橋や中堤防、漁船、なめらかな水面に夕空が映りこみ、絶好の撮影ポイント。



川口神社 卍



昔から利根川河口を出入りする漁船の船主や漁業者の守り神として、漁師の信仰が厚い。



千人塚



銚子(酒器)の口の地形と強風・荒波に伴って、かつて多発した海難事故の犠牲者を慰霊しています。



岩石公園



海難対策としての水路開削に伴い、河口から除去された古銅輝石安山岩を展示しています。



美加保丸遭難の碑



戊辰戦争の際、幕府軍艦8隻は銚子沖で暴風雨に遭い、美加保丸が黒生海岸で沈没しました。



銚子漁港



日本三大漁港の一つで、水揚量は全国1位。銚子沖はかつては海難事故が多発する危険な海でした。



夫婦ヶ鼻



約1700万年前に海(水深100~数100m)で堆積した地層。かつては岬であり、夫婦ヶ鼻と呼ばれる。



鮫子漁港

日本三大漁港の一つで、水揚げ量は全国一位(2011年から8年連続)です。鮫子沖は、親潮(寒流)と黒潮(暖流)がぶつかり、利根川から有機物を含む淡水が流れ込むので、プランクトンが大量に発生し、それを食べに魚が集まってくるため、全国を代表する良い漁場となっています。さらに、その魚を追ってくるイルカ・クジラ類も多く見ることができます。また、近く海鹿島の海岸には、明治時代までは、アシカやトドが生息していました。

その一方で、鮫子沖は海難事故が多発する危険な海でもありました。大正から平成までの漁港整備事業によって、海難事故は大幅に減ったものの、「平成27年9月関東・東北豪雨」では、鬼怒川から流れてきた大量の漂着ゴミが、利根川に流れ込み、河口の鮫子漁港を覆い尽くしました。



▲鮫子漁港(第3卸売市場)の漂着ゴミ

千人塚

近世以降、鮫子付近での海難事故により亡くなった船の乗組員の御霊を祀った場所です。現在でも、慰霊と供養のための行事「川施餓鬼」が毎年1回行われています。この場所の名前の由来は、一説には、1614年に起ったとされる大津波によって、出漁中の船が遭難し、千人以上の溺死者を埋葬したのがこの地であるとされています。

利根川の河口付近は、川幅が狭いうえに、干潮時と満潮時の潮の流れが急で、「阿波の鳴門か鮫子の川口、伊良湖渡合が恐ろしや」と言われた日本の海の三大難所の一つとされました。そのため、鮫子には「鮫子の川口でんでんしのぎ」ということわざが残っています。これは、鮫子の川口付近を航行する時は、他の船のことはかまっていられず、それぞれ自分の船の安全確保だけで精一杯だという意味です。津波常襲地帯の東北地方の三陸沿岸部に伝わる津波避難の伝承「津波でんでんこ」とも似ています。



▲川施餓鬼

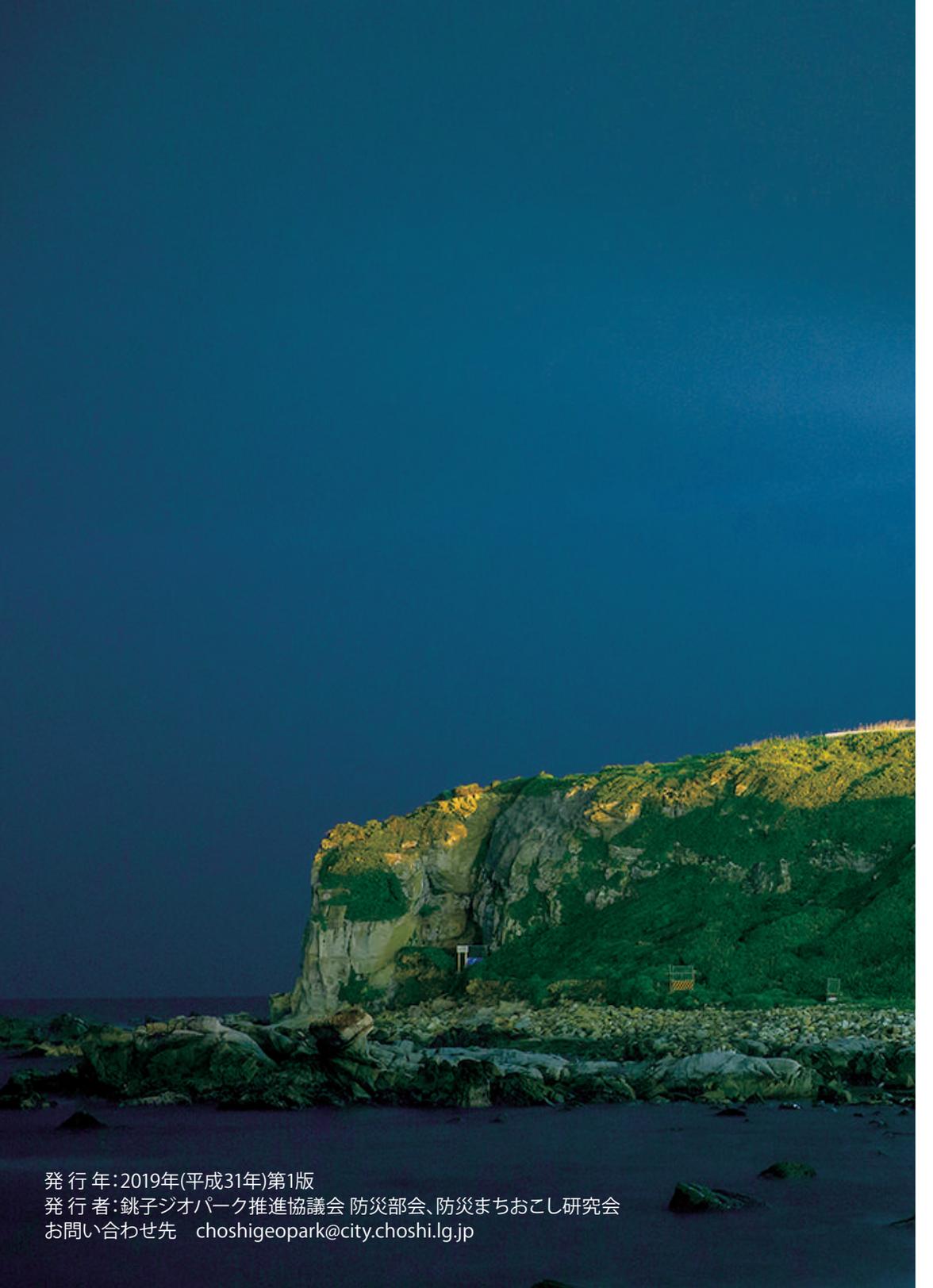
美加保丸遭難の碑



▲美加保丸遭難の碑

戊辰戦争の際、榎本武揚が率いる旧幕府軍の艦隊8隻が江戸を逃れて函館に向かっていく途中、1868年8月に暴風雨に遭いました。そのうちの1隻である美加保丸が鮫子の黒生海岸の沖で座礁・沈没し、乗組員614名のうち13名が死亡しました。亡くなった乗組員が新政府に反対する兵士であったため、遭難碑は当初建てられませんでした。その後、1882年9月に地元の有志によって黒生海岸に遭難碑が建てられました。

ちなみに、艦隊8隻のうち別の1隻は、1860年に日本で初めて太平洋横断を果たした「威臨丸」でした。その前年に、濱口梧庵は、艦長の勝海舟から同乗を誘われましたが、家業などを優先して断念しました。



発行年: 2019年(平成31年)第1版

発行者: 銚子ジオパーク推進協議会 防災部会、防災まちおこし研究会

お問い合わせ先 choshigeopark@city.choshi.lg.jp